新潟教育研究所

令和３年３月16日発行　第 46 号

公益財団法人 新潟教育会
新 潟 教 育 研 究 所

〒951-8104　新潟市中央区西大畑町590-3　新潟教育会館　TEL・FAX 025－222－2971
URL http://kyouikukai.jp　E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

バリアを取り除く

社会福祉法人 七穂会 業務執行理事
虹の家所長
小 野　　真

私が学校に勤務していた頃，総合的な学習の時間での福祉教育の代表的単元として「アイマスク体験」がありました。子どもたちは，アイマスク体験を通して，視覚障がい者の方がいかに大変な日常を送っているかを体験して，見えない「不便さ」「怖さ」「不安」を実感させることをねらっていました。目の見える子どもたちは，目の見えない視覚障がい者を助けてあげようなどの感想を述べ，教師もそのようにまとめていることが多かったのではないでしょうか。

４年前に私は，今の事業所（虹の家）に支援員として入りました。作業の手順も何もかも初めてのことで少し落ち込んでいる時期がありました。その時声をかけてくれたり，作業のやり方を教えてくれたりしたのが利用者のＭさんでした。また，Ｍさんが作った製品を見ると、私には到底できそうにない精度の高さに驚いたことを思い出します。

これまで私は，障がい者のマイナス面に意識を向け，弱者と考えていました。Ｍさんの作業活動や普段の生活から困っている人への配慮や製品づくりの緻密さ，何よりもチャレンジ精神の凄さなど数え切れないほどのプラス面を実感させられました。私と同じような考えを持っている方が皆さんの身近な職場や地域には，まだまだいらっしゃるのではないでしょうか。あるときは，「誰かを支える担い手になり」，あるときは，「誰かに助けてもらう受け手となる」双方向のお互い様の付き合いでありたいものです。

従来，障害とは本人の疾病によるものと捉えられてきましたが，今日ではそれだけでなく，むしろ生活のしづらさは「環境」の差によるものであるという考え方が強調されるようになってきました。当事業所で行われている作業活動もこの考えが根底にあります。作業手順や作業設備を全てそのままの規格にあわせたとします。その際，障がい特性や個人の持っている長所が異なる利用者は達成可能な作業目標を持つことが難しくなります。体格や障がい特性そして，個人の持っている長所，それに合わせた冶具などの作業環境を構成することが求められます。このことで，手先の器用さ・集中力・体力・体格の個人差を問わず，自分にあった作業目標を持って取り組むことができます。つまり，個々の利用者にあった作業環境を整えることが，作業能率や意欲の向上に繋がる大きな要因と考えています。これは，作業の時だけに限らず全ての生活場面に共通しています。利用者の皆さんが「具体的にいつ，どんな場面で困っているのか」「その困りごとを解消するための適切な配慮は何か」を把握して，より良い生活を目指しています。日常生活の中で不便を感じることや様々な活動をしようとするときに障壁になっているバリアをきめ細かく対応しながら取り除いています。

このことは，事業所だけに留まらず地域に浸透させていくことが求められます。地域社会のバリアによって「障害を被る人たち」があってはなりません。この解消には，障がい者だけのことではなく，地域社会全体の問題として捉え解決していかなければなりません。七穂会の使命の一つです。

コロナ禍だからこそ大切にしたいこと

新潟教育研究所 教育アドバイザー
佐藤隆夫

はじめに

昨年からのコロナは未だ収束していない。コロナによって以前とは違う対応を迫られている先生方のことを考えると，本当に胸が詰まる思いである。学校でも感染への不安から差別の問題も起きている。このコロナ禍にあってどう子どもや保護者と向き合っていけばいいのか，少しでも先生方の手助けになればと思い，以下のことを書かせていただいた。実践の参考になれば幸いである。

昨年３月，日本赤十字社が，コロナの感染拡大を止めるために「病気・不安・差別」の３つの負のスパイラルを断ち切ることが必要だとの提言を行った。感染症への不安が差別や偏見を生み，それがまた病気への不安へとつながっていく。では，どう断ち切ればいいのか。提言には学校でもできるいくつかの方法が述べられているが，その中で特に大切なこととして私が考えるのは，不安を安心に変えてやること。安心できる人間関係をつくり，不安に陥らせないということである。

そのためにどうするか。その方法として私は教育相談の傾聴とノンバーバルによる見取りを提唱したい。先生方も普段から行っていることと思うが，この状況下，今一度，意識して行っていく必要があると考えている。以下に簡単に説明したい。

１　ノンバーバル＝身体言語　を大切に

人が人を判断する場合，95％以上は，言葉によらない言葉（眼の動き，声のトーン・強弱，しゃべりの早さ，表情仕草，態度，服装や髪型等）で判断しているという。言葉の内容はほんの数％。

普通の会話場面でも，聞き手は話の内容とともに上記のようなノンバーバル面も同時に把握しながら話を聴いている。また話し手も聞き手がどういう人間か，評価しながら話をしている。聞き手の不用意な言い方，聴き方は相手の不信を招く。それはすぐにノンバーバル面に現れる。現場での教師・子ども・保護者・同僚との関係に応用してほしい。相手のノンバーバルに気付くことは，信頼関係を築くための重要な要素となる。そのためには，まず相手のノンバーバルを観察してみることである。その上で相手と自分の気持ちに気付くこと。「私と話すときはこの子は伏せ目がちになる」なぜだ。「いつまでだんまりを続ける気だ。何とか言え」ではなく，あんたとは今しゃべりたくないんだよ，と。相手のノンバーバルに対し，その裏の気持ちを想像してみる。そして，自分のその時の気持ちや投げかけた言葉を振り返ってみるといい。そうすると相手のこともよく分かってくる。

２　「直そうとするな分かろうとせよ」（傾聴）

この言葉は故國分康孝氏の言葉である。「傾聴」は教師の言葉を挟まず，この人はどんなことを考え，どんな気持ちでいるのだろうということに焦点を当て，話を聴くことである。教師側の判断ですぐに指導したり，直そうとしたりしないことである。もちろん即刻指導しなければならないときもあるが。ちなみに学級の子どもたちに傾聴を指導しようとする先生方がいるが，それは間違いである。教師が子ども一人一人を聴ければよいのである。そのノンバーバルが他の子どもに波及し，子ども同士が聴き合う関係になっていく。いわゆるモデリングである。子どもの話を聴きながら，どういう気持ちでいるのか，何が言いたいのか，分かろうと口を挟まずじっくり耳を傾けてみる。そのことが，子どもの安心感を生み，信頼関係へとつながっていく。

終わりに

ノンバーバルによる見取りと傾聴は，安心できる人間関係，信頼関係を醸成する。職員・保護者との関係も同様である。コロナ禍にあって，子ども・保護者・職員同士のつながりと安心を提供する方法としてぜひ実践してほしいと思っている。

「冬から春へ」

新潟教育研究所 研究員
宮川由美子

はじめに

雪模様の年の始まり「密」になりようがない近くの神社へ初詣。母と私二人分の人形(ひとがた)をコートのポケットに，運動不足の体を前に進める。途中，雪だるまづくりに歓声を上げている親子や家族を幾組も目にした。「フツーの生活だなあ。」暗いニュースばかりの昨今，ささくれ立っていた私の心に温かさが戻った。

1　年賀状終い

年賀状の販売枚数が年々減っているという。私は，毎年200枚ほどを出したりいただいたりしている。一昨年あたりから「これまでご厚情を賜り・・・」という「年賀状はこれにて終了」という内容を目にするようになった。今年はそれが際立ったような気がする。そこに至った理由の殆どが，今，日本中を悩ませているコロナ禍によるものらしい。本音を言うと，私も考えなかったわけではないが・・。年末の慌ただしい折りだが，印刷の文字だけでは味気ない。ささやかな一言を添え，その方をひととき思い浮かべる。元日，お雑煮を祝い，ストーブの前で「さて」と分厚い束を手にする。いただいた年賀状で，その方のこの一年，これからの一年をぼんやりと思う。嬉しいのは，この拙い論説（？）を楽しみにしていると書かれた年賀状。若い先生方の２世の写真付き年賀状。子どもたちへの愛情溢れる熱年教師の熱血年賀状。私の年賀状終いは，もう少し先になりそうである。

2　ギガスクール構想

「ミヤカワさんのように，ICTを苦手としている人こそ必要なんだ。」と訳の分からない説得をされ，年末年始にかけてギガスクールサポーター研修会に出向いた。渡されたiPadをスタートさせることから既に冷や汗状態。カードを作ったり，そのカードに文字入力したり。インターネットから画像を取り込んだり，それを貼り付けたり。これだけで肩が凝った。我々の年代，というより私は，新しいことにはある程度頭の中で整理し納得した上で取りかかる。若い細胞の持ち主である子どもたちは，感覚であれこれとやってのける。羨ましい・・。コロナ禍の影響で整備計画が前倒しになり加速されている中で，先生方のご苦労はいかばかりだろう。だからこそ「私も分からないわよ。でも，やれるとこからやってみよう。」と苦手意識をもつ先生方に寄り添うサポーターが必要なんだそうである。そうか，それなら私にもできるかも。

3　チコちゃんに叱られる

一年前のちょうど今頃，この番組で群馬県島小学校の「よびかけ」が紹介された。当時の斎藤喜博校長の学校改革に目が釘付けになった。

子どもたちのための改革

通信簿の５段階をやめる。運動会は子どもたちが計画・実行する。合唱を多く取り入れ，大きく元気な声を出す習慣をつける。(すごい！)

教師のための改革

教師の休みを多く取り入れる。教員会議の終了時刻を決め，絶対にオーバーしない。無駄な仕事をさせない。(働き方改革の先駆けか！)

子どもたちや教師の変わり様は言うまでもない。この二方向の改革の集大成が卒業式の「よびかけ」だったという。取り組みは教師たちの勉強会を経て全国へと広がった。今年，それぞれの学校でどんな卒業式が繰り広げられただろうか。

おわりに

３年経つと，気力体力がこんなにも劣ってしまうのかと実感した2018年以来の雪攻撃。田舎で古屋の我が家は道路までのアプローチが長い。いつもの勝ち気はどこへやら，弟家族にＳＯＳ。「首都圏でも雪が舞っています。」とさも重大そうに伝えるテレビのアナウンサーに向かって「フ～ン・・・。」と呟いた。

アドバイス
日記

「子どもの内面の様子の見取りについて」の研修

～1年生 主題名「親切にするときもちがいい」 教材文「はしの上のおおかみ」～

新潟教育研究所
教育アドバイザー
安井靖子

今回，長岡市立上川西小学校より，「若手の先生の道徳の公開授業に際し，授業者へは指導案づくりの段階から，他の教師には，授業後に道徳授業での見取り・支援の仕方などを具体的な手法も含めて指導してほしい」との依頼を受けた。

指導案の段階では，文面に書いてある事柄を具体的にどのように見取って授業を進めるのかを確認した。

道徳の見取りは，教師が内面の現れる仕草や言い方を見極めないと見取りそびれてしまう。

算数なら，子どもが解決に見通しをもち，学習プリントを欲しがる様子を見取って，学習プリントを配布すると，勢いよく鉛筆の音がする。課題解決に一直線である。その後，勢いよく手が上がる。

道徳では，「どうしたらいいだろう」のような「ためらい」を見取って，「書きながら，もう一人の自分と相談して自分の考えをはっきりさせられるかな。」と声をかけつつ，学習プリントを配布する。すると，子どもは，口元に手を当て，ためらいながらも，ゆっくりと少しずつ自分の考えを書き進めていく。このような見取りの仕方を複数例示して，指導案を検討した。

実際の授業では，１年生が，前のめりになりながら口元に手をもっていき，「おおかみさんが前よりもずっといい気持ちなったのは・・・」と考えている姿，書くのをいったん止めて，黒板の場面絵をじっと見て，再び書き始める姿など，子どもが考えをじっくりまとめている過程が見取れた。

授業者は，教材文の提示では動作化で「最初は一本橋を通せんぼする」・「二回目は渡す」という場面を子どもが考える余地を残す程度にさらりとしてみせた。

展開場面で，役割演技を取り入れた。うさぎ役の子どもが，役割演技後，教師に小声でつぶやいて，２回目の役割演技を行った。「さっき，おおかみさんに言い忘れたことがあったから」とのことである。１年生なりに「ありがとうの思いを表現できなかった」と自覚しての素晴らしい申し出であった。おおかみ役の子どもも，それと呼応するように，１回目より気持ちを伝えられるように言葉と仕草で表現できた。「自分が○○さんだったら，こんなことを○○にもっと伝えたい」と意欲をもっている姿であった。見ている子どもにも，仕草や言葉の言い方から気持ちは伝わっていった。

公開授業後の指導では，画像で「この仕草から，この表情から，このように見取る」と具体的に複数例示できた。校内研修として道徳の見取り方を共通認識することの一助になったのであれば，幸いである。

教育アドバイザーを要請して

長岡市立上川西小学校　佐藤直子

構想段階から指導案や具体的な指示・発問について，安井靖子先生から丁寧にご指導いただきました。協議会では，「特別の教科　道徳」へ至るまでの歴史や，道徳科における用語の定義について教えていただきました。また，道徳科で求める「子どもが自分事として考えを深めているか」の見取りのポイントついても，子どもの姿を通して具体的に示していただきました。教師が子どもを見取る目をもっていることが大切であると感じました。授業者はもちろん，全教職員が道徳科について深く学ぶ貴重な時間となりました。